



## 七 再び、A I 書店へ

---

こうして、A I 書店は閉鎖され、良太は、再び、強制されることなく、気ままに作品を書き、懸賞小説に応募したり、自分が登録している電子文庫に掲載し続けた。たまに、応募した出版社から応募作品は佳作です、との返事があるものの、大賞はとれないままで、ベストラ作家どころか、ベター作家にも程遠かった。

それが何回も続くと、作家になるという気持ちは次第に弱くなっていき、一日に書いていた時間が二時間から一時間、一時間から三十分へと日にしに短くなっていくとともに、毎日から一日おきに、二日おきから三日おきにと、書く間隔もどんどんと広がっていった。

そんなある日。良太の下に一通のメールがスマホに届いた。

「みんなのA I 書店。あなたも作家になりませんか」

あの忌まわしき思い出しかないA I 書店からのメールだ。何が、みんなの書店だ。確か、ハッピーが乗っ取ったはずじゃないのか。ハッピーは書店経営はもうやめると言っていたはずじゃなかったのか。喉元の熱さを過ぎればじゃないけれど、また、復活したのか。

それにしても、もう、騙されるもんかと良太はメールを無視する。だが、人間は不思議なもので、あえてA I 書店を記憶から消そうとすればするほど、頭の中で、A I 書店の文字がくっきりとかつ太字となり、しかもフォントサイズが十・五ポイントから七十二ポイントまで拡大してくる。

気になって、インターネットからA I 書店を調べる。三チャンネルだか四チャンネルだかの投稿者からの口コミでは、「作家となって、自分の好きなように小説を作り、読むことができます。まるで、植木鉢のアサガオのように、簡単に、花を咲かせることができますよ」と、星印が五つ付いていた。こうなると、書店によけいに行ってみたくなる。

三段変速の愛用の自転車のペダルを踏み、目的地のA I 書店に向かう。そこは、以前のA I 書店と同じ建物だった。違うのは、看板が「A I 書店」から「みんなのA I 書店」へと看板が付け替えられていることと、あの頃は、ほとんどお客さんがいなかったはずなのに、今は、建物の外にまで行列ができてきていることだ。

「列の最後はここですか？」

良太は背広姿の男性の背中に向かって声を掛けた。

「ああ。そうですよ。今日は一時間待ちかな」

振り向いたサラリーマンは良太に目を合わすことなく、スマホをいじっている。

「ここには何回も来ているんですか？」

良太は、人と話すときぐらいスマホから目を離せよと、少し苛立ちを覚えるものの、相手に尋ねたいことから、ここはじっと我慢する。

「仕事に行き詰った時なんかに、ここに来て、作品を創って、読んでますよ」

「作品を創る？」

良太の頭の中に、過去の忌まわしき思い出がフラッシュバックする。

「ええ、そうですよ。場面に応じて、自分の好みのストーリーを選択し、読むことができるんですよ。具体的に言えば、小説の節ごとに三択のうちから一つのストーリーを選び、一つの小説で十節ぐらいはあるから、三の十乗とすると、約六万通りの小説を楽しむことができますよ。もうこうなると、選んだというよりは創ったという方が正しいかな。もちろん、自分が創った小説を登録して読者にも提供することもできますよ。それがベストセラーになれば、あわよくば印税生活が期待できますよ。どうです。すごいでしょ。最近はやりの参加型の電子書籍版と言ったらいいのかな。もちろん、ベストセラー作家は夢のまた夢だとしても、ここで作品を創っていると、不思議なことに、行き詰っていた仕事に新たなヒントが湧いてきて、自然と解決できるんですよ。だから、ここに来ることは会社も公認です」

サラリーマンの目は真剣だ。パチンコや喫茶店、コンビニで仕事をさぼっているような後ろめたさは微塵も感じられない。返って、誇らしげだ。やる気満々の顔だ。

「会社も公認ですか？しかも、作品を創るなんて、職業作家以外の素人でもそんなことができるんですか？」

良太は、以前、この書店で作品を書いていたことを相手には黙っていたままだ。

「論より証拠。百聞は一動に如かず、ですよ。あなたも実際にやってみたらすぐにわかりますよ」

サラリーマンがようやくスマホから目を離すとにこっと笑った。

一体どういうことだ。A I 書店は閉鎖したんじゃないのか。確かに、ポッパの電源を切って、後は、ハッピーに任せて、俺を始め、五木さん、森さん、東原さんの四人は解放されたはずだ。それなのに、また、こうして、A I 書店は開店している。それに、以前よりも、店の外にまで行列ができるなど、繁盛しているではないか。一体、どういうことだ。頭が混乱して、語彙力が不足しているのか、他に言うことがないのか、同じセリフが二度出た。

一時間は待たせようか。良太は外で待っていたお客さん数人と一緒に書店の中の長椅子に座ることができた。当初の予定よりも三十分以上待った。サラリーマンが言うとおりの、予定は未定であることは、このことから証拠づけられた。

「いらっしゃいませ」

受付のポッピーが頭を下げた。まだ、生きていたんだ。いや、復活したと言った方がいいのか。それとも、姿形は同じだけど、中身は、ハッピーなのか。良太の頭の中は、靴下やパンツ、シャツなどが、同じタンスの中で乱雑にしまわれており、ハンカチが欲しいのにどこにあるのかわからず、靴下を掴んだまま立ち往生している自分の姿を想像した。

書店の中は、以前のように棚はなく、個人ごとに机の仕切りがあり、机の上にはパソコンが置かれ、その前に椅子があった。

「百番の方、D一二十五の席にお座りください」

良太は受付で貰った番号を見る。確かに百番だ。ぐるっと見渡す。入り口に近い方から、AからD、そして、アルファベットごとに、一から二十五の番号がついていた。百人の席が満杯の状態だ。

「ちえ、残念。百一番か。順番は次か」

良太のすぐ隣に座っていた男がガムで風船を膨らまし、それがぱちっと割れて、鼻に付着した。

「ついていない時は、どこまでもついていないんだ。つくのはガムぐらいか」

男が自嘲気味にA I 書店の看板を見ている。良太はそんな男を無視して、自分の席を探す。

「あった」

良太の席はフロアーの一番奥だった。画面に集中しているお客さんの体に触れないよう、できるだけ爪先立ちで立ち、体を細くして自分の席に着く。

「いらっしゃいませ。ようこそ、A I 書店へ」

画面がぱっと明るくなり、メールが流れた。

「ここは、あなたが好きな小説の分野を、あなたが選んで、あなたが物語を創る書店です。さあ、迷宮の書店へ」

先ほど、良太の前に並んでいたサラリーマンから簡単に説明を受けたけれど、書店側の説明では何のことかわからない。意味がわからない。ただ、とまどうだけだ。辺りを見回す。だが、お客さんたちは、時折、マウスをクリックするほかは画面に魅入っている。

「みんな、慣れてるんだ」と思う間もなく画面には

「歴史、お笑い、恋愛、冒険、推理、探偵、ユーモアなど、好きなジャンルをお選びください」と表示される。良太はこれまで探偵小説を書いてきたので、探偵部門を選ぶ。

「探偵小説ですね。主人公の、性別、年齢、職業、趣味などをお選びください」

性別は男性、年齢は二十三歳、職業は市役所職員、趣味はランニング、美術鑑賞を選ぶ。そう自分自身を主人公とした。

「ありがとうございます。それでは、どうぞ、小説を創ってお読みください」画面の表示が変わった。

えっ、これだけで、自分が好きな小説を創れるのか。小説を読めるのか。自分ならば、構想、案、添削、推敲すれば、小説の長さにもよるが、数日、数週間、数か月はかかる。こんな短時間で、本当に、小説が創れるのか、読めるのか。良太の疑問は増すばかりだ。

「あなたの選んだ情報から、今後、創っていく小説は、題名が新入職員奮闘記。市役所に就職した新入職員が、探偵好きが高じて、市民から持ち込まれる問題、課題、謎を、上司や先輩職員、時には赤の他人の力も借りながら解決していくストーリーです。別名、市役所職員は見た、シリ

ーズです。よろしければ、次に進んでください」

再び、画面が変わる。あれだけの情報で、小説ができるのか。だけど、まさに、リアリティをもって自分の事のように感じる。そう、自分が主人公なのだ。これなら、疑似体験なので、新入職員の研修にも使えるし、仕事を選ぶ際の参考資料ともなるのではないだろうか。

良太も周りのお客さん同様、創作活動に惹きこまれて、画面を読みながら、第一節を、今日は、先輩と飲みに行くバージョン、ジムにトレーニングに行くバージョン、時間外勤務に専念するバージョンの三択のうちからどれを選ぶか悩む。当たり前だけど、人生とは選択の連続、積み重ねだと思い知る。だけど、三択とはいい選択だ。AとBの二つからの選択だと、Aを選んだ後、Bを選んだほうがよかったと後悔しがちだが、A、B、Cからの三択だとAを選んだ後、振り返っても、BやCを選んでもAと同じようなもの、いや、Aの方がましだろうと思ってしまうからだ。

この後、休みの日は、A 昼家で昼まで寝過ごす、B 早朝からサイクリングに行く C 映画を観に行く など、次々と三択から選んで行く。こうした創作読書？に専念していると、突如、音楽が流れてきた。

「五十分が過ぎました。目や頭が疲労しています。健康のために十分間休みましょう。A I 書店はブラック企業ではありません。読者のことを第一に考えています。みなさん。目をつぶるなり、立ち上がって肩を回したり、屈伸したりするなど軽い運動をしましょう」とメッセージ音が流れる。以前、小説を書いていた時と同じだ。健康には留意していることは新書店でも引き継がれている。

良太は立ち上がり、背伸びをすると、首や肩を回したりする。周りのお客さんも良太と同じように立ち上がっている。ふと、その中のお客さんと偶然にも目が合った。

「五木さん、ですよね」

そこには、あの閉じ込められた空間で、一緒に小説を書いていた五木ぶり夫さんだった。

「ああ、君は、確か・・・」

「本名は良太です。最後のペンネームは、明智大六郎でした」

「ああ、思い出した。あの時は楽しかったね」

「楽しかった？」

良太にはポップーに拘束され、無理矢理書かされた苦い思い出しかない。

「そうだと。いろんな作家になって、いろんな作品を書いたからね。最初、指示された時は、こんな小説なんか書けるわけではない、と思ったけれど、いざ、有名作家のパクリのような名前だったけれど、その作家になった気分で、パクリのような内容だったかもしれないけれど、とりあえず作品を書いたことは、自分の才能の幅が広がって、作家としての可能性が広がったよ。

まあ、俳優が、二枚目から銀行員、殺人鬼まで、様々な役を演じるのと同じことなんだろうね。でも、今は、ダメだな。自分ではいいネタが思い付かないんだ。そうこうするうちに、今は、日記さえも書いていないよ」

五木さんは自嘲気味に笑い、目を伏せた。

「その点、君なんかは、まだ若いから、次から次へとアイデアが浮かんでくるんじゃないかな。最近、書いた小説を読ませてくれよ。いや、きっと、どこかの文学賞に応募して、入選しているんじゃないか。ペンネームを教えてくれよ。出版されているなら、その本を買うよ。できれば直筆のサインが欲しいな」

五木さんが本気なのか、冗談なのか、良太にはわからない。ただ、顔を上げて良太を見つめる五木さんの真剣な顔が金魚鉢の中で泳いでいる出目金のように凸顔で迫ってくる。そんな様子に良太はとまどい、指を髪の毛の中に入れ、ぐるぐると回す。どうしていいのかわからない時の良太の癖だ。

「いやあ。僕もあれから書いていないんですよ。なんだか、急に書く気力、意欲がなくなってしまって……」と言葉を濁す。

「そうか。君もか……」

五木さんは近づいた顔を良太から離すと、視線を書店の天井に向けた。そこには、かつて地下の座敷牢にあったように四隅にスピーカーと監視カメラが設置されていた。だが、二人に小説を書けとの指示はない。

良太は思う。お互い、AIに指示されないと小説も書けない能力なのか。AI書店から逃げ出したはずなのに、今でも、AI書店の呪縛から逃れられないのだ。見えない力で支配されているのか。良太も五木さんと同じように天井のスピーカーから何かの言葉が発せられるのを待って

いた。

神の声の代わりにチャイムが鳴った。目の前の物語が始まる時間だ。さっきはどこまで進んだのか。そして、自分はどこへ進もうとしているのか。そして、終わりはあるのか。それよりも、なぜ、自分はここにいるのか。A I 書店からは脱出、抜けだしたはずじゃなかったのか。まだ、A I の支配を受けたいのか。

画面は、今日は職場に行くのか、お休みしてサイクリングに行くのか、ふてくされてベッドで朝寝をするのか、選んでくださいとのコメントが入る。どれも嫌だ。選択枝もきれいさっぱり洗濯してやる。良太はハッピーに向けてメールを送る。

「ハッピー。A I 書店をやめたんじゃないのか。ポツパーはもういないんだろ」

しばらくすると、あの時と同じように、メールが返送されてきた。